P2-018

日常の育児相談相手が「誰もいない」と感じている母親の実態把握－健やか親子21最終評価の全国調査から見る育児の孤立－

山崎 さやか^{1,2}、篠原 亮次³、秋山 有佳⁴、山縣 然太郎⁴¹健康科学大学看護学部 看護学科²山梨大学大学院医工農総合教育部³健康科学大学健康科学部 理学療法学科⁴山梨大学大学院総合研究部医学域 社会医学講座

【背景】

近年、地縁の希薄化等、育児環境が大きく変化しており、乳幼児を持つ母親の孤立が課題となっている。育児の孤立が高じると、育児不安が高まり、児童虐待につながる可能性も示唆されている。しかし、育児で孤立している母親は、不安が顕在化し難く、社会的な活動によって社会的関係を構築することが難しいため、育児不安研究の対象から外れてしまうことが指摘されている。育児で孤立している母親に焦点をあてて、その実態を全国的に分析した研究は見当たらない。

【目的】

健やか親子21最終評価における全国データを使用して、育児の孤立をしている母親の特徴を同定することである。

【方法】

対象は「健やか親子21」最終評価実施対象となった全国472市区町村において、平成25年4月から8月の間に34か月、1歳6か月、3歳児健診を受診した児の保護者75,622名である。調査方法は、各市区町村から自記式質問票による調査を保護者に依頼、健診時に回収し分析を行った。日常の育児の相談相手は「誰もいない」を選んだ母親を育児で孤立している母親とし、その母親の属性や育児環境を記述統計した。

【結果】

日常の育児相談相手が「誰もいない」と回答した母親は、3,4か月：20,729人中29人(0.1%)、1歳6か月：27,922人中51人(0.2%)、3歳：26,971人中99人(0.4%)であった。相談相手がいない母親は、現在の喫煙状況が「喫煙している」、暮らしの経済状況は「苦しい」、夫の育児は「ほとんどしない」の割合が高かった。加えて、「育児に自信が持てない」、「虐待しているのではないかと思う」、「現在の子育てに満足していない」、「ゆったりした気分で子どもと過ごす時間がない」の割合が高かった。居住地区については、特別区に居住している母親の割合が高く、「地域のお祭りや行事、子育てサークルや教室に参加していない」、「道を声をかけてくれる地域の人がいない」、「道を声をかけてくれる地域の人はいない」の割合が高かった。

【考察】

相談相手が誰もいないと感じている母親は、地縁や血縁の薄い都市に居住しており、児の成長発達を阻害するリスクを多く抱えていることが示された。我が国では今後も東京圏の人口集中が続くことが予測されているため、都市で孤立する母親へのアウトリーチをしてニーズ調査を実施し、根拠に基づいた支援方法を検討していく必要がある。

P2-019

家族の習慣の規則性 (Family Routines) と児の社会性の発達との関連

細川 陸也^{1,2}、桂 敏樹²¹名古屋市立大学看護学部²京都大学大学院医学研究科

【目的】

家族の習慣の規則性 (Family Routines) は、家庭生活の一貫性や予測可能性を高め、日常生活におけるストレスから児の心身の健康を守ると考えられている。本研究は、家族の習慣の規則性と児の社会性の発達との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】

2017年10-12月、愛知県内の小学3年生(8-9歳児)1,427名を対象とし、その養育者へ自記式質問紙調査を実施した。主な調査項目は、家族の習慣の規則性 [FRI: Family Routines Inventory: 「親は1日を始めるにあたり決まってしまうことがある」「家族は平日一緒に夕食または朝食を食べている」「親は子どもと会話する時間を1日のどこかに設けている」「親は子どもが良くないことをしたときに決まってしまうことがある」等の25項目]、児の社会的能力 [SCS-P: Social Competence Scale Parent-version]、児の問題行動 [SDQ: Strength and Difficulty Questionnaire] について尋ねた。

【結果】

有効回答の得られた児718名(有効回答率: 50.3%)を分析対象とした。対象属性は、平均年齢9.08±0.33であり、男児366名(51.0%)・女児352名(49.0%)であった。

家族の習慣の規則性と児の社会性との関連を検証するため、独立変数を家族の習慣の規則性、目的変数を社会的能力(自己制御、向社会性)および問題行動(外在化問題、内在化問題)、調整変数を性別・家族構成・家庭の経済状況・親の養育態度とし、重回帰分析を実施した。その結果、家族の習慣の規則性が高い家庭の児ほど、「自己制御」「向社会性」が有意に高く、一方、「外在化問題」「内在化問題」は有意に低かった。

【考察】

本結果より、家族の習慣の規則性は、児の社会的能力を向上し、問題行動を軽減する可能性が示唆された。家族の習慣に一定の規則性が存在することは、児の永続感や予測可能性を高め、また、家族間の相互作用を通じて、対人スキルを育み社会適応力を向上させているかもしれない。児の社会性の発達を促すかわりには、児への直接的な養育態度だけでなく、家族の習慣の規則性といった家庭環境全体に働きかけていくことが大切であると考えられる。